

		チェック項目	はい	いいえ	工夫している点	課題や改善すべき点
環境・体制整備	1	利用定員が発達支援室等のスペースとの関係で適切であるか。	5	0	古民家と広大な牧場敷地、山や川といった多様な自然環境を一体的に活用。定員内であっても活動エリアを分散させることで、子どもが「伸び伸びと」過ごせる空間を確保し、密を避けている。	雨天時や冬季など室内活動に制限が生じる際の、古民家内スペースの有効活用と代替プログラムのバリエーション拡充が継続課題。自然環境を活かした活動を屋内でも展開できるよう工夫を検討する。
	2	利用定員やこどもの状態等に対して、職員の配置数は適切であるか。	5	0	基準以上の多職種(保育・教育・馬事等)を配置。一人ひとりに目が届く体制を基本とし、生活や馬事活動の中での自然な支援を実践。送迎時の丁寧な対話を通じた情報共有も重視している。	送迎時間の長さや急な対応時に一時的に人手が薄くなる場面への柔軟な配置が課題。また、春先の職員配置変更に伴う保護者の不安を払拭するため、早期の新体制周知と、確実な引き継ぎ期間の確保を徹底する。
	3	生活空間は、こどもにわかりやすく構造化された環境になっているか。また、事業所の設備等は、障害の特性に応じ、バリアフリー化や情報伝達等、環境上の配慮が適切になされているか。	5	0	自然や馬との暮らしの中で、視覚的・感覚的に落ち着く環境構成を意識。物理的障壁については、スタッフの直接支援により安全を担保し、子どもが安心して過ごせる場を整えている。	古民家の構造上、完全なバリアフリー化が難しいため、視覚支援(写真やイラスト)による情報の可視化を強化。構造化の工夫により、子どもがより自立して見通しを持って動ける環境を追求する。
	4	生活空間は、清潔で、心地よく過ごせる環境になっているか。また、子ども達の活動に合わせた空間となっているか。	5	0	古民家の情緒を活かし、木の香りと自然光を取り入れた心地よい空間を維持。猫アレルギー等への配慮を含めた清掃・片付けを徹底し、保護者から評価されている「子どもがリラックスして伸び伸びと過ごせる環境」を整えている。	古民家特有の断熱性や空調効率に課題があるため、季節に応じた暖房環境の改善を検討中。また、牧場環境における虫刺され等の懸念に対し、除草の徹底や防虫対策の強化、保護者への迅速な情報共有を継続的な課題とする。
	5	必要に応じて、子どもが個別の部屋や場所を使用することが認められる環境になっているか。	5	0	馬小屋、裏山、川沿いなど、広大な自然環境を活かし、子どもが他者の視線を気にせず「伸び伸びと」一人で安心して過ごせる場を複数確保している。	雨天時や冬場の室内活動において、古民家内の限られたスペースで「一人になれる場所」をいかに確保するかが継続課題。可動式パーテーションの導入や、静養スペースの質的向上を検討中。
業務改善	6	業務改善を進めるためのPDCAサイクル(目標設定と振り返り)に、広く職員が参画しているか。	5	0	「聴く連絡帳」や音声記録を活用し、現場での気づきを即座に共有。スタッフミーティングでは強み(自然環境)と弱み(送迎による接点不足)を多角的に分析し、日常的な改善を重ねている。	送迎時間が長いという地理的制約もあり、多忙な中で記録や分析が後回しになる傾向がある。振り返りの内容を具体的改善アクションへ繋げるための「仕組み化」と時間の確保が課題。
	7	保護者向け評価表により、保護者等の意向等を把握する機会を設けており、その内容を業務改善につなげているか。	5	0	「聴く連絡帳」やLINE、評価アンケートを通じて、保護者の意向(虫刺され対策、避難訓練の可視化要望など)を迅速に把握し、具体的な対応策を策定・実施している。	自由記述に含まれる質的な意見の分析をさらに深化させる必要がある。特に、送迎メインの家庭とのコミュニケーション不足を補うための、効率的な情報集約・共有体制を強化する。
	8	職員の意見等を把握する機会を設けており、その内容を業務改善につなげているか。	5	0	少人数のチーム体制を活かし、野生動物との遭遇時の対応や環境整備のアイデアなど、現場の気づきを自由に出し合える関係を構築している。	協議された内容(街からの遠さと支援の質の関係など)を、組織としての正式な改善計画として「見える化」するプロセスが不足しており、定期的な整理と記録の場が必要。
	9	第三者による外部評価を行い、評価結果を業務改善につなげているか。	5	0	馬介在活動や感覚統合の専門家を招き、プログラムの質向上に向けた助言を得ている。外部の視点を取り入れることで、自然環境下でのリスク管理と支援の専門性を両立させている。	外部からの専門的な助言を、保護者への「安心の根拠(訓練の可視化報告等)」として具体的に展開する力がまだ弱い。助言を実務に落とし込むためのフォローアップ手順を確立する。
	10	職員の資質の向上を図るために、研修を受講する機会や法人内等で研修を開催する機会が確保されているか。	5	0	ホースセラピー、自然体験、虐待防止、安全管理等の研修機会を積極的に提供。特に「命を敬う」姿勢を支援の根拠とするための内部勉強会を重視している。	春先の職員配置変更に対する保護者の不安を払拭するため、どの職員も一定水準の専門スキル(馬事活動や記録技術)を保持できるよう、体系的な研修カリキュラムの整備と実践化が課題。
適切な支援の提供	11	適切に支援プログラムが作成、公表されているか。	5	0	三陸駒舎の多様な自然環境(馬・山・川)を活かした独自方針を策定。実践内容に合わせ、子どもの「伸び伸びとした活動」を支えるプログラムを常にアップデートしている。	内部共有は進んでいるが、保護者への定期的な方針公表や見直し共有が不十分。特に、安全管理(避難訓練等)の実施状況を含めた外部公表資料の整備が課題。
	12	個々の子どもに対してアセスメントを適切に行い、こどもと保護者のニーズや課題を客観的に分析した上で、放課後等デイサービス計画を作成しているか。	5	0	観察・対話に加え、馬事活動中の反応や情緒の変化を多角的に分析し、個別計画に反映。保護者が評価する「個々の特性」に寄り添った支援の根拠としている。	フォーマルな尺度の導入に加え、送迎時間の長さから不足しがちな保護者との直接対話によるニーズ収集を、ICT(LINE等)や音声記録等で補完・定型化することが今後のテーマ。
	13	放課後等デイサービス計画を作成する際には、児童発達支援管理責任者だけでなく、こどもの支援に関わる職員が共通理解の下で、こどもの最善の利益を考慮した検討が行われているか。	5	0	活動後の対話を通じ、馬事、教育、福祉など多職種スタッフの視点を統合。春先の職員配置変更時においても、子どもの安心を最優先した検討をチームで行っている。	体系的な検討時間の確保と記録化が課題。特に新旧スタッフ間での引き継ぎ精度を高め、保護者の不安を払拭するための定期的な検討体制を強化する。
	14	放課後等デイサービス計画が職員間に共有され、計画に沿った支援が行われているか。	5	0	朝のミーティング等で計画のポイントや個別配慮事項(感覚過敏やアレルギー等)を日々共有。自然環境下でのリスク管理と支援目標の連動を意識している。	職員全体への浸透をさらに深めるとともに、新体制への移行期における引き継ぎの工夫が必要。誰が担当しても一貫した支援ができる体制を盤石にする。
	15	こどもの適応行動の状況を、標準化されたツールを用いたフォーマルなアセスメントや、日々の行動観察なども含むインフォーマルなアセスメントを使用する等により確認しているか。	5	0	「聴く連絡帳」等で蓄積した日々の行動観察や、馬との関わりにおける非言語的な変化を重視。本人の微細な「変化」に敏感に対応し、個別支援に活かしている。	インフォーマルな観察に強みがある一方、標準化された評価ツールとの組み合わせによる客観性の担保が課題。支援の妥当性をより明確に示す工夫が必要。
	16	放課後等デイサービス計画には、放課後等デイサービスガイドラインの「放課後等デイサービスの提供すべき支援」の「本人支援」、「家族支援」、「移行支援」及び「地域支援・地域連携」のねらい及び支援内容も踏まえながら、こどもの支援に必要な項目が適切に設定され、その上で、具体的な支援内容が設定されているか。	5	0	三陸駒舎の暮らしを通じ、4要素を意識した構成を実践。特に、街から遠い環境ゆえの「家族支援」や「地域連携」の重要性を計画に盛り込んでいる。	計画文書において、それぞれの観点を明示し、保護者に分かりやすく提示する工夫が不足。各支援のねらいをより構造化して記述・説明することが求められる。
	17	活動プログラムの立案をチームで行っているか。	5	0	多様な自然資源と季節性を加味し、チームで柔軟にプログラムを検討。野生動物との遭遇等、現場の状況変化に即した即興的なプログラム立案も共有している。	担当スタッフの知見に依存する場面を減らし、チームとしての知見を「活動案」として見える化・蓄積していくことが、組織的な支援の質向上のための課題。

	18	活動プログラムが固定化しないよう工夫しているか。	5	0	馬事活動、火起こし、森遊び、創作など、子どもの声や自然条件に応じて日々柔軟に変更。保護者が評価する「伸び伸びとした活動」の多様性を維持している。	即興的対応の多さが、活動の意図や狙いの事後共有を弱める要因になりやすい。狙いの再確認と振り返りの仕組みを強化し、支援の意図を明確に保つ。
	19	こどもの状況に応じて、個別活動と集団活動を適宜組み合わせ放課後等デイサービス計画を作成し、支援が行われているか。	5	0	牧場内での作業や遊びの中で、個のペースを尊重しつつ自然に集団が交差する構成を実現。個別の安らぎ(一人になれる場所)と集団の学びを両立させている。	支援記録や評価において、個別活動と集団活動それぞれの効果や変化の記述が曖昧になることがある。それぞれの狙いに対する成果を整理して記述する工夫が必要。
	20	支援開始前には職員間で必ず打合せを行い、その日行われる支援の内容や役割分担について確認し、チームで連携して支援を行っているか。	5	0	その日の目的・配慮点(虫刺され対策や特定の不安事項等)を朝に確認。特に、春の体制移行期には、新スタッフへの具体的な役割伝達を重視している。	急なプログラム変更時における現場連携の記録化が不十分。柔軟な対応と、その根拠・内容の明文化を両立させ、チーム支援の精度を高めることが課題。
	21	支援終了後には、職員間で必ず打合せを行い、その日行われた支援の振り返りを行い、気付いた点等を共有しているか。	5	0	活動後に「聴く連絡帳」の素材となるエピソードや、子どもの感覚・感情の変化をスタッフ間で共有。この対話が支援の質を高める源泉となっている。	送迎業務等で時間が限られる中、振り返りの質を落とさず可視化する工夫が必要。共有された気づきを翌日の支援や個別計画へ確実に繋げる仕組みを強化する。
	22	日々の支援に関して記録をとることを徹底し、支援の検証・改善につなげているか。	5	0	文章や音声での記録を徹底。保護者からも信頼を得ている「聴く連絡帳」のデータや療育記録を、定期的なモニタリングや面談の貴重なエビデンスとして活用している。	支援の流れと記録が物理的に結びつきにくい場面を解消するため、フォーマットの改善を検討中。特に地理的制約を補う情報提供の質をさらに高める。
	23	定期的にモニタリングを行い、放課後等デイサービス計画の見直しの必要性を判断し、適切な見直しを行っているか。	5	0	6ヶ月ごとを目安に、子どもの成長や家族の状況変化(春の進級等)を話し合い計画を修正。データに基づいた、納得感のある見直しを心がけている。	蓄積された音声や写真データの整理・分析に負担がかかっている。効率的な振り返りを支援する簡易的な分析ツールの導入により、質の高いモニタリングを継続する。
	24	放課後等デイサービスガイドラインの「4つの基本活動」を複数組み合わせ支援を行っているか。	5	0	牧場で「生活・遊び・学び・交流」が一体となった暮らしの中で、4要素を自然に展開。馬のお世話を通じてこれらを複合的に体験できる環境を提供している。	各活動が4つの基本活動のどこに対応しているか、スタッフ間の意識共有と整理が不足。活動の意味を再定義し、保護者へ分かりやすく説明する工夫が必要。
	25	こどもが自己選択できるような支援の工夫がされている等、自己決定をする力を育てるための支援を行っているか。	5	0	馬との関わりの中で、子ども自身が「やりたい」を選択する時間を尊重。保護者が評価する「自発的な意欲」を引き出す場づくりを大切にしている。	自己選択の結果と、それがどのような成長に繋がったかを記録・共有する工夫が必要。当事業所独自の「待つ支援」の価値をより具体的に可視化する。
関係機関や保護者との連携	26	障害児相談支援事業所のサービス担当者会議や関係機関との会議に、そのこどもの状況をよく理解した者が参加しているか。	5	0	支援内容を熟知したスタッフが会議に参加。馬事活動を通じた情緒の変化や成長を、専門的視点と現場でのエピソードを交えて丁寧に伝達している。	会議頻度は半年毎に限られるため、街から遠い立地条件を考慮した、ICT活用等による日常的な情報共有の持続性と、質の高いフィードバック体制の構築が課題。
	27	地域の保健、医療(主治医や協力医療機関等)、障害福祉、保育、教育等の関係機関と連携して支援を行う体制を整えているか。	5	0	学校、医療機関、相談支援等と個別に連絡を取り合い、必要な情報交換を実施。当事業所独自の「馬介在活動」の意図や効果を各機関へ説明し、理解を得ている。	関係機関ごとの連携スタイルや情報の粒度に差がある。特に、緊急時の対応やリスク管理(虫刺され等)に関する報告ルールの標準化を推進する必要がある。
	28	学校との情報共有(年間計画・行事予定等の交換、こどもの下校時刻の確認等)、連絡調整(送迎時の対応、トラブル発生時の連絡)を適切に行っているか。	5	0	学校行事や下校時刻の変化を事前に把握し、送迎計画に反映。支援中に生じた変化や気になる点は、学校との双方向のやり取りを通じて、子どもの安定に繋げている。	学校との情報連携が一方方向になりがち。送迎時間の長さから保護者との接点が限られる分、学校との「連携の質」をより高め、多角的な支援体制を盤石にする。
	29	就学前に利用していた保育所や幼稚園、認定こども園、児童発達支援事業所等との間で情報共有と相互理解に努めているか。	5	0	保護者を通じて園等からの引き継ぎ情報を収集。当事業所の内部連携も活用し、一貫性のある支援(馬事活動の継続等)に役立てている。	情報が担当者個人に依存しがち。組織的な引き継ぎ・共有プロセスの確立を目指す。
	30	学校を卒業し、放課後等デイサービスから障害福祉サービス事業所等へ移行する場合、それまでの支援内容等の情報を提供する等しているか。	5	0	相談支援事業所を通じて、移行先へこれまでの支援経過や馬事を通じた強み・役割意識の記録を共有。	移行先機関との連携がケースごとに異なるため、支援内容の情報を体系的にまとめた「移行支援シート」等の構造化と、円滑な引き継ぎプロセスの構築が課題。
	31	地域の児童発達支援センターとの連携を図り、必要等に応じてスーパーバイザーや助言や研修を受ける機会を設けているか。	5	0	圏域内にセンターは無いが、専門機関とのネットワークを構築。ケースに応じた助言や研修の受け入れを通じて、自然環境下での専門的支援の質を高めている。	専門機関との継続的な関係性をさらに強固にする必要がある。特にスタッフの専門性向上(感覚統合等)に向けた、定期的なアドバイザー体制の整備が課題。
	32	放課後児童クラブや児童館との交流や、地域の他のこどもと活動する機会があるか。	3	2	近隣に施設はないが、開放イベント等を通じて地域の子どもたちとの交流を創出。「開かれた牧場」として、多様な人々が交差する機会を意図的に設けている。	定期的な交流機会の設定が物理的に難しいため、当事業所ならではの体験(火起こしや乗馬等)を軸にした、地域共生プログラムの定例化を検討中。
	33	(自立支援)協議会等へ積極的に参加しているか。	5	0	地域の自立支援協議会等へ参加し、現場の声を反映。当事業所が地域防災拠点や多世代交流の場として果たす役割についても、積極的に発信・共有を行っている。	地域会議で得た情報の内部共有体制が不十分。協議内容を全スタッフに周知し、日々の支援や安全管理(避難訓練の可視化等)へ迅速に反映させる仕組みを強化する。
	34	日頃からこどもの状況を保護者と伝え合い、こどもの発達状況や課題について共通理解を持っているか。	5	0	「聴く連絡帳」の音声記録や写真で日々の躍動感を共有。送迎時間の長さで不足しがちな対面時間を補い、保護者が評価する「相談のしやすさ」と信頼を維持している。	感覚的な表現に偏りすぎず、支援計画の目標に対する具体的な成長の証跡を可視化する工夫が必要。地理的制約を超えた、深いレベルでの共通認識の形成を追求する。
	35	家族の対応力の向上を図る観点から、家族に対して家族支援プログラム(ペアレント・トレーニング等)や家族等の参加できる研修の機会や情報提供等を行っているか。	5	0	勉強会を開催し、子どもの特性に寄り添った環境調整(馬との関わり等)をスタッフと共に模索。保護者の安心感と「家庭での関わり」のヒントを提供している。	ペアレント・トレーニング等の体系的なプログラム整備は未着手。保護者が高く評価する「当事業所の環境」を家庭生活に応用するための、より具体的な支援技術の伝達が課題。
保護者への説明責任等	36	運営規程、支援プログラム、利用者負担等について丁寧な説明を行っているか。	5	0	初回利用時にパンフレットと対面での説明を徹底。当事業所独自の馬介在活動のリスクや効果、負担額等について丁寧な案内と同意形成を行っている。	送迎メインの利用形態により、継続利用中の保護者と規程類を再確認する機会が不足しがちである。定期的な更新時や面談の際に、再説明を行う仕組みが必要。
	37	放課後等デイサービス提供を作成する際には、こどもや保護者の意思の尊重、こどもの最善の利益の優先考慮の観点から踏まえて、こどもや家族の意向を確認する機会を設けているか。	5	0	面談や馬事活動中の対話を通じ、本人や保護者の思いを丁寧に抽出。保護者評価で「相談しやすい」と評価された信頼関係を基盤に、個別の意向を汲み取っている。	子ども本人の微細な意志表出(特に非言語的なサイン)をどう読み取り、支援に反映させるか。年齢や状態に応じた表出支援の技術向上が求められる。
	38	「放課後等デイサービス計画」を示しながら支援内容の説明を行い、保護者から放課後等デイサービス計画の同意を得ているか。	5	0	計画文書を提示し、保護者の意向を反映した上で同意を取得。当事業所での「役割のある暮らし」がどのような成長に繋がるかを共有している。	計画文書の記述が抽象的になりやすく、日々の具体的な生活場面や馬事活動との繋がりが見えにくい。写真や動画等の記録と連動させ、より具体的に提示する工夫が必要。

	39	家族等からの子育ての悩み等に対する相談に適切に応じ、面談や必要な助言と支援を行っているか。	5	0	LINE、メール、面談等で随時相談に対応。街から遠い立地を考慮し、迅速かつ柔軟なレスポンスを心がけることで、保護者の安心感に寄与している。	随時対応に留まらず、保護者のニーズに応じた定期的な相談枠を意図的に設定する等、体系的な家族支援の枠組み作りが課題。
	40	父母の会の活動を支援することや、保護者会等を開催する等により、保護者同士で交流する機会を設ける等の支援をしているか。また、きょうだい同士で交流する機械を設ける等の支援をしているか。	5	0	きょうだい児も参加可能なイベント(火起こしや乗馬等)を多数開催し、家族全体の交流を促進。勉強会等を通じて保護者同士が自然に話ができる場を提供している。	保護者評価でも評価の高い「きょうだい支援」を継続しつつ、送迎による接点不足を補うような、保護者同士の定期的な交流・連携の仕組み化が今後のテーマ。
	41	子どもや保護者からの苦情について、対応の体制を整備するとともに、子どもや保護者に周知し、苦情があった場合に迅速かつ適切に対応しているか。	5	0	管理者を中心にLINE等も活用した迅速な初期対応を意識。些細な要望も逃さず、保護者評価で支持される「相談しやすい体制」を実質的に運用している。	対応ルールの明文化と全スタッフへの周知・徹底が不十分。苦情解決のプロセスを透明化し、公式な案内体制として再整備することが求められる。
	42	定期的に通信等を発行することや、HPやSNS等を活用することにより、活動概要や行事予定、連絡体制等の情報を子どもや保護者に対して発信しているか。	5	0	「聴く連絡帳」や写真共有を通じ、活動の躍動感を多角的に発信。定期通信の発行により、当事業所の日常と子どもの姿を丁寧に伝達している。	日々の発信は充実しているが、HPの基本情報の更新や組織的な情報発信の継続性がスタッフの多忙さに左右されやすい。安定した発信体制の構築が課題。
	43	個人情報の取扱いに十分留意しているか。	5	0	写真・音声の使用に関して事前に詳細な同意を取得。当事業所独自の活動記録(馬事活動の様子等)を適切に管理・制限し、プライバシー保護に努めている。	利用状況の変化やICTツールの多用化に応じ、個人情報保護に関する内部ルールの再整備と、全スタッフへの教育・意識徹底が今後必要。
	44	障害のある子どもや保護者との意思の疎通や情報伝達のための配慮をしているか。	5	0	馬との関わりに見られる非言語コミュニケーションを重視し、安心できる関係性の中で子どもの発信を支援。保護者との連絡も多様な手段で配慮している。	視覚支援ツールや絵カード等の代替手段をより体系的に導入・活用し、意思疎通のバリエーションを広げることが今後の支援の質向上の鍵となる。
	45	事業所の行事に地域住民を招待する等、地域に開かれた事業運営を図っているか。	5	0	畑仕事や牧場開放イベントに地域住民やボランティアを招待。多様な人々が交差する「開かれた拠点」として、地域共生の実績を積み重ねている。	定期的な「公開行事」の開催に加え、地域社会との協働による成果を広報物等により可視化し、地域における存在意義を広く発信する工夫が必要。
非常時等の対応	46	事故防止マニュアル、緊急時対応マニュアル、防犯マニュアル、感染症対応マニュアル等を策定し、職員や家族等に周知するとともに、発生を想定した訓練を実施しているか。	5	0	感染症や事故対応等の基本マニュアルを完備。多様な自然環境(山・川・牧場)でのリスクを想定した実地対応をスタッフ間で共有し、迅速な初期対応を徹底している。	防災・避難等の定期訓練の実施を重ねること(はもとより、保護者から「見たことがない」との指摘があったことを受け、訓練の様子を写真等で共有し、安全管理の可視化を図る。
	47	業務継続計画(BCP)を策定するとともに、非常災害の発生に備え、定期的な避難、救出その他必要な訓練を行っているか。	5	0	BCPを策定済み。街から遠い立地を考慮し、大雪や停電時の備蓄・対応ノウハウを蓄積。非常時でも馬の安全確保を含めた事業継続ができる体制を整えている。	書面化されたBCPの内容が現状(人員配置や地域防災計画)に即しているか定期的に見直し、新スタッフへの実地研修を定例化することで、実効性をさらに高める。
	48	事前に、服薬や予防接種、てんかん発作等の子どもの状況を確認しているか。	5	0	利用開始時に詳細な健康情報を聴取。馬アレルギーの有無や服薬状況をスタッフ間で即時共有し、野生動物も出没する自然環境下での安全な活動に反映させている。	情報更新の定期確認体制を強化。特に春の進級時期など、生活環境が変化するタイミングでの年1回以上の見直しと、最新情報の確実な引き継ぎをルーチン化する。
	49	食物アレルギーのある子どもについて、医師の指示書に基づく対応がされているか。	5	0	医師の指示がある場合はそれに基づき、無い場合も保護者の意向に沿った代替食材の準備や調理環境の配慮を徹底。個別のニーズに寄り添った対応を行っている。	調理イベント等のイレギュラー時における対応手順を明文化。誰が担当しても安全に実施できるよう、手順の再確認と全スタッフへの周知・徹底を強化する。
	50	安全計画を作成し、安全管理に必要な研修や訓練、その他必要な措置を講じる等、安全管理が十分された中で支援が行われているか。	5	0	牧場内の危険箇所巡回や活動中の危険予知(KYT)を日常化。自然の中で「伸び伸び」活動するための安全基盤を、スタッフの意識づけを通じて構築している。	安全計画の定期的な更新・ブラッシュアップの手法を確立する。現場の気づきを計画へ迅速に反映させ、常に実効性の高い安全管理措置を講じることが課題。
	51	子どもの安全確保に関して、家族等との連携が図られるよう、安全計画に基づく取組内容について、家族等へ周知しているか。	4	1	送迎時や「聴く連絡帳」を通じ、活動中の安全確保に関する情報を丁寧に共有。保護者との信頼関係を基盤に、安全な運営への理解と協力を得ている。	安全計画そのものについて、保護者へ定期的に説明・周知する機会を設ける。計画に基づく具体的な取り組み(訓練実績等)を明示し、安心の根拠を提示する。
	52	ヒヤリハットを事業所内で共有し、再発防止に向けた方策について検討をしているか。	5	0	些細な気づきも組織内システムやミーティングで即時共有し、再発防止策を検討する文化が定着。蓄積された情報は、自然環境下でのリスク回避に直結させている。	蓄積された記録の定例的な分析と、改善策の振り返りを仕組み化する。傾向を把握し、より効果的な事故防止および支援の質向上に繋げる体制を強化する。
	53	虐待を防止するため、職員の研修機会を確保する等、適切な対応をしているか。	5	0	定期研修に加え、馬という「命」を敬う活動を通じて人権意識の向上を重視。倫理観に基づき、子どもの最善の利益を優先する支援文化を醸成している。	外部研修への参加機会を拡充し、最新の知見(不適切なケアの未然防止等)を常に取り入れることで、客観的な視点での権利擁護体制をさらに強固にする。
	54	どのような場合にやむを得ず身体拘束を行うかについて、組織的に決定し、子どもや保護者に事前に十分に説明し了解を得た上で、放課後等デイサービス計画に記載しているか。	5	0	身体拘束を行わず、馬のいる穏やかな環境を活かした感情調整や、安心できる関係づくりによる支援を徹底。保護者に対してもその方針を明示している。	方針を堅持しつつ、万一の際の判断基準や緊急対応手順を改めて文書化。保護者への説明・了解を得るためのプロトコルを整備し、より透明性の高い支援を目指す。